

フルート奏者 谷藤万喜子と、作曲家・ギタリスト 本田優一郎の夫婦ユニット「ホラネロ」。

「流水の鳴き音」「黒曜石の粉砕音」等、地域ゆかりの音素材を取り入れた作曲法により、地域の魅力を音楽で次世代に伝える可能性を追求している。これまでにNHK総合「おはよう日本」「おはよう北海道土曜プラス」「北海道クロスアップ」「ほっとニュース北海道」「オホーツク心の風景」や、NHKBSワールドプレミアムで取り上げられるほか、AIRDO 全便機内オーディオ放送で楽曲が採用された。また、トルコ、フィンランドで文化交流コンサートを行うなど、海外でも活躍。これまでに5枚のアルバムCD「ドコマデモ」「FLOWERS」「ヒンメリア」「ヒグマのうた」「THE SECOND FRONTIER」をリリース。2019年4月より津別町に移住し、開拓や森林をテーマに制作を行っている。

フルート・ピッコロ・・・谷藤万喜子／東京学芸大学教育学部管弦打楽器専攻 卒業、東京芸術大学大学院室内楽専攻 修了
ギター&作曲・・・本田優一郎／宇多田ヒカル、The Alfee、高見沢俊彦、大黒摩季、ベッキー 等、樋口一らの作品やライブに作曲、ギタリストとして参加。

1. THE SECOND FRONTIER

「衰退期にある現在こそ先人達のフロンティアスピリッツを受け継ぎ、新たな冒険をしよう。」(by Neo Folk)

令和の開拓者の意味を込めたこの曲のタイトル「THE SECOND FRONTIER」は、ジャケットデザインの大西重成氏が率いる Neo Folk のプロジェクト名だ。100年前に津別を切り拓いた先人に思いを馳せつつ、持続可能な町の未来をイメージしてホラネロが音楽に描き、2019年に津別町開拓100周年記念式典で初演された。曲作りにあたって「愛林のまち 津別町」を象徴する町有森や、地元の木材加工場に取材を行い、植林してから120年かけて森を再生させることの意義や、津別から世界に発信する熱い想いを聞いた。

曲は津別川の源流があるノノの森のせせらぎ音に始まり、中盤のアップテンポのシーンでは加賀谷木材(株)、(株)山上木工の取材協力を得て集音したリズムカナルな木材加工音をパーカッションとして使用し、長年培われてきた「人と木のストーリー」を描いている。



2. 開拓の夜明け

明治維新後、仕事を失った旧幕府側の武士たちは、屯田兵として北海道の開拓、北方警備を担うために移住・配備された。プログレッシブ・ロックのような曲調の中、尺八風のフルートの音色や箏が醸し出す和の響きが、列強諸国に囲まれ緊張状態にあった日本を表している。

3. ダイヤモンドダスト

希望を持って北海道にやってきた開拓団。手元の資料によると網走港に着いた開拓団は見上げるほどの樹木が生い茂る中、曳舟や徒歩でそれぞれの目的地まで移動している。しかし到着した先は森林で覆われ、与えられた家屋の天井からは月や星が顔をのぞかせている。冬を目の前にした10月の頃である。のちに屯田兵の一人がインタビューでこう答えている。「とても難儀ではありましたが、ひと懐ひと懐がこんだけず土地が増えると思ってそれを楽しみに一生懸命開墾に従事しました。男も女も娘でも嫁さんでもみんな。」

そのような日々を乗り越えて見たダイヤモンドダストの、宝石に似た輝きは内地から来た人々の目にどう映ったのだろうか。

4. フロンティアスピリッツ

鬱蒼とした原始林を奥へ奥へと進み、現在の町の原型が作られた時代。そのバイタリティに思いを馳せて描かれた力強いメロディは、前代未聞の困難に立ち向かう現代の私たちにも、潜在的な力が潜んでいることを思い出させてくれるだろう。

5. ファーストステップ

新しい村の誕生と、活気に満ちた風景を描いている。豊富な木材資源を運ぶため森林鉄道が整備され、林業、農業、酪農が発展した。これらの産業の多くは、いまも町を支えている。

6. 黄金色の時空

第二次世界大戦後の復興で町も賑わい、最盛期を迎える。今では小学校、中学校が各一校しかないが、最盛時には合わせて17校もの学校があるくらい子供達の数も多かった。

7. 夕暮れの架け橋

林業の衰退とともに町の成長にも陰りが見えていく。職を求めて若い世代の都会部への流出が増え鉄道も廃止になっていった。未来への架け橋を残して。

8. 森林鉄道物語

汽笛を聴くと懐かしさを感じる。単なるノスタルジックではなく、フルート奏者として同じ「笛」の音に共感するのかもしれない。あるいは、守るべきもの、忘れてはならないものが胸の奥に呼び起こされるせいだろうか。

線路を滑走する車輪、うしろに消えていく踏切音、山にこだまする汽笛、吹きあがる蒸気音...この地域一帯に染み付いているであろう、森林鉄道の音の残影。

「森林鉄道物語」は音楽のなかでそれらに息吹を与え、活気ある人の営みと風景を再現した作品である。

かつて、早朝から蒸気の上る雨宮21号に乗せられて、命がけで働く父や母の背中を見てきた少年たちがいた。半世紀以上経った現在、彼らは北海道遺産に指定された雨宮21号の管理・保存に情熱を注いでいる。歴史遺産としての価値だけでなく、時代を切り拓いた先人たちのこころの原風景を次世代に伝える伝承活動だ。ホラネロは彼らに強く共感し、2019年「鉄道まつり」(丸瀬布会場)に招聘された際にこの作品を書き下ろし、初演した。

※北海道遺産「雨宮21号」は東京・雨宮製作所で製造された初の国産11トン機関車。1928(昭和3)年、丸瀬布-武利意森林鉄道に配備され、国有林から伐り出した丸太や生活物資の搬送に携わってきたが1958(昭和33)年廃止。地元の強い要望で1976(昭和51)年、北見営林局から旧丸瀬布町に譲渡された町は「森林公園」を建設、機関車を走らせた。森林鉄道蒸気機関車の動態保存は全国で唯一のもの。(ホームページより)

9. 匠-TAKUMI-

北海道のほぼ中央、大雪山連峰の麓に位置する旭川市とその近郊は日本有数の家具産地に数えられている。冬は雪に覆われる北海道では、木材の天然乾燥が困難で家具の量産には適さなかったが、昭和30年代に入り加工技術の進歩によって大量に家具が出荷されるようになった。すぐそばに木の命を感じながら、技術と情熱が薪々と次世代へ伝えられてきた。

旭川家具を代表する木製家具専門メーカー 匠工芸(東神楽町)は、社長自ら技能五輪国際大会家具部門で銀賞受賞の、職人集団。まさに匠の集まり。「ナチュラル&クラフト」をコンセプトにかかげ、どんなに技術が進歩しても最後は手で仕上げることこだわっている。

社長に、若者たちに受け継いで欲しい技は何か、とお尋ねしたところ即座に「ものづくりの心です」と。その種やかな笑顔が忘れられない。工場を見学した際に若い職人と交わした清々しい挨拶からも、先人から後輩へ着実に「心」が受け継がれている証を感じた。

「匠-TAKUMI」は毎年「家具の日」に合わせて開催されている「星空コンサート2018」にホラネロが出演した際、書き下ろした作品である。

職人の椅子に身を委ね、近頃農家の方から差し入れられた旬の野菜を味わう音楽のひとつ。「こんな時だからこそ、人が集まり、音楽が聴けて良かった」と喜んで頂いた。2018年9月8日、北海道胆振東部地震直後のことだった。会社敷地内で「音探し」をし、アカゲラのドラミングと鳴き声、木槌や工場の作業音、泉のせせらぎなどを楽器し作品にしている。

10. 北のひかり

～テーマは開拓と五穀豊穡～

この曲の中で使われている音は、訓子府小学校スクールバンドの子供たち、ホラネロライブ訓子府実行委員会、そしてホラネロが、一緒に「音探し」して見つけたものだ。探した場所は、くねっぶ歴史館。

地元ならではの音素材を探すため、私たちは展示品にまつわるストーリーを学び、開拓者の目線になって「本物」に触れる時間を共有した。

開拓当時に使われていた島田鎌、森林鉄道で使われていた大釘、主要産業である農業や酪農で使われていた唐箕(とうみ)や集乳缶。これらの子供たちが叩く、擦る、回す...様々な方法で出した音を曲の中で使用している。

日本最古の民謡と言われる「こきりこ」(富山県)は五穀豊穡を祈って、実際に農具を叩き楽器として使用するが、「北のひかり」も現代の「こきりこ」を意識して作曲したものである。

曲名の「北のひかり」は、坂本直寛(坂本龍馬の甥)が率いて高知県より入植した移民団「北光社」から名付けられている。明治30年、想像を絶する原始林を開拓し、地域発展の礎を築いた。北光社による当時の開拓民募集広告には「ここに楽天的な村を建設して、天を仰いで土地を耕すことができ、そこには政治の圧力もなく、なんら束縛もない、迷信も罪悪もない、馬鹿げた義理や習慣風俗もなく、有るものは一人一人に田畑あり、家もあって幸福自由あり、人情もあって一つの理想的な社会をつくり出すことができる。」

実に人生にとってこれ以上うれしいことはないのではないか。どうか働きたい人は、奮って北光社の旗印を信じて募集に応じてきてほしい。」とあり、遙か北国に理想郷を作ろうとした熱意が伺える。

彼らのフロンティアスピリッツに想いを馳せつつ、お聴きいただきたい。未来を担う、子ども達の歌声と共に!



さいごに...

北海道に暮らす者としてアイヌや、囚徒たちのことを忘れてはいけません。

北海道を開拓したのは屯田兵や民間の開拓団と思いがちだが、それ以前に原野に暮らしていたのはアイヌ民族であり、彼らの道案内なしには新天地に辿り着くことはできなかったはずである。また、道路を造り開拓民を迎える基盤を築いたのは網走囚徒外役所(のちの網走監獄)の囚徒たちだった。道央とオホーツク地域を結ぶルートは険しい地理的条件と野生動物のヒグマとの戦いの連続であったといわれており、囚人労働史上で最も悲惨な事例とされている。先人たちに想いを馳せるとき、彼らへの敬意と感謝の心も忘れてはならないと強く思う。